

天空之城

かなちゃん

第二章 呪い姫

第二章 【呪い姫】

「来るぞ」

「はあ。バリアライト」

僕らは町と全てに結界を張った。

「食らえ。ライトヌス」

黄金の花の光りが町をおそった。

「ステイ今よ」

「はい。お母様。我が花により死んでください」

「フラワーロースティア」

バラの花吹雪が飛んできた。

「今です。デイラント」

「はい。お嬢様。食らえ。聖なる光りよ。」

ライトソード

天空族の力は私達の力は私達の力

を超えるような力だった。

「まずい。結界が崩れる」

「諦めるな。この岡山を救う方法がある。」

私がやる」

「雄彦様 」

私に任せろ。皆私の後ろにつけ」

「はい」

人々は雄彦の後ろについた。

「では始める」

雄彦は空へ主の神に誓いを放ち始めた。

【呪文】

「聖なる火神よ。我が名は佐藤雄彦。那野葉の父である。

我は姫の為にこの地を救いたい。我に力をお貸し

下さい」

...

花巫女は笑いながら雄彦に告げた。

「無駄なあがきね」

その時空から光が降ってきた。

「何？天がお告げを聞いただと」

「おまえの負けだ。どうやら主は俺の言葉

聞いてくれたようだ。見せてやる神の力を」

雄彦は術を唱えた。

【呪文】

「いにしえの神よ。この地に。

平和を与えたまえ。そして

いにしえの光りを与えたまえ。

青龍ライトンフラワーレイア」

呪文が解き放たれた

敵の結界を解除された。その瞬間、雄彦が放った

光が私達と町ごと包み込んだ。

そして、その光は敵の攻撃を跳ね返した。

「女王様。お嬢様。ここは危険です。このままでは

私達も危ない。ここから離れた方がいいです」

「そうですね。撤退しましょう」

「はっ」

「岡山の皆さんまたいつか会いましょう。滅びの日に」

「待て。一つ効く。お前の目的はなんだ」

「この地の支配と。姫の暗殺よ。おほほほ」

「くっ」

空家は笑いながら姿を消した。

「消えた…」

「雄彦様。ありがとうございます。あなたが来てくれたから

私達は助かりました」

「だが町はもう助からん」

「けどこうして私達はあなたのお陰で死なずに

済みました」

「いいえ。礼を言うのは早いです。町を復活

させましょう」

「出来るのですか」

「はい。皆さんが力を貸していただければ」

「勿論です」

「では始めましょ。皆で町の復興を」

…

「一緒に祈りましょ」

「神様どうか私達の町を救いたまえ。。平和と命のために。

力を与えたまえ。アーメン」

私達が祈りを込めた瞬間、光りが差し込んだ。崩れた町に。

私達が目を開けると町が立っていた。

これは。神様のお陰だ」

「皆の祈りが通じ神様が救って下さった」

「ああ。ありがとう。神様万歳。万歳」

岡山に平和が訪れた。一方、天空族は天空の地を通り、
天空城に戻ろうとしていた。

「天空城に戻られるのですか」

「いいえ。私だけちょっと行くところがあるの」

「姫に呪いを掛けるのですか」

「ええ」

「しかし、気付かれます」

「大丈夫。。この鏡を使い呪いを掛ける予定」

「いい明暗です。では成功を祈ってます」

「ありがとう。ではまた天空城で会いましょう」

「了解。皆参ろう」

「はい」

精霊達は天空城へ去っていた。

「さて始めますか」

一方、那野葉はすやすやと眠っていた。

「ねえお母さん那野葉起きないよ」

「大丈夫。つい二時間前に寝たばかりだから

もう目を開けるわよ」

「本当？」

「…」

姫は目冷ました。

「ほら起きたわよ」

「本当だ。見て那野葉笑ってる」

「本当だわ」

一方、鈴は呪文を唱えていた。 鈴は鏡を出し

那野葉の姿を移し出した。

「さあ呪いの始まりよ」

【呪文】

「いにしえの邪悪な呪よ。姫に呪いをけたまえ。いにしえの

呪いを。ダークダークスラーダークダークスラーダークダーク

ファイアリーライト。はー」

その瞬間、姫の体が光り始めた。

「なにこの光。この光は巫女の。駄目よ。」

駄目よ。那野葉を殺さないで」

咲良は那野葉抱きしめた。

「…」

那野葉は泣き始めた。

「お母さんしっかりして」

「綾野。お母さんの手を離さないでね」

「うん」

姫は闇に包まれた。その瞬間、姫の中に

闇が入り混んだのだ。

「お母さん闇が消えてるよ」

「良かった。姫が無事で」

母はほっとしたように姫を見つめた

次の瞬間、首元に呪野印がついてる事に気がついた。

「那野葉」

「お母さん。どうしたの」

「那野葉に呪いが掛けられた。もう

終わりよ」

母は泣き崩れた。

「ただいま」

…

夫が見た姿は母の泣き崩れた姿とまだ幼い姫

が呪に掛けられた姿だった。

「まさか奴が。しまった」

「あなた」

「矢恵。咲良」

父是那野葉と母を抱きしめた。

「お父さん。那野葉が」

「分かってる。綾野。これからは三人で

強くいき、ひっそり暮らそう。この子が救って

くれるまで」

「うん。那野葉助かる」

「ああ。この呪文を掛けよう。ライトヒリス」

父は姫に呪文の掛けた。

「これで那野葉は呪から半分解放された

。プラス結界も張っておいた。これで安心して大きくなる」

「お父さんありがとう」

「ありがとう。あなた」

「ああ。これからは三人でこの子を守ろう」

「うん」

「那野葉。那野葉」

...

一方、天空城へ戻った巫女は喜びに満ちあふれて

いた。

呪いも成功ね。さあ新たな時代で貴様を

私の物にしてあげるわ。ほほほ」

果たして姫の運命は未来はどうなるのか。

姫は呪いにたち向かう事ができるのか。

三章へ続く…

【第三章】 約束

あれから月日がががれ私達は南方という

地域に引っ越しをした。実家から大分離れた

地域である。現代の南方はマンションがあった

が取り壊され何も無い。その場所に立ってる

屋敷に私達四人は暮らしている。だがその屋敷

には雄介といういる。田島家の息子である。彼には兄もいる。

兄は小学生であるが雄介は私と同じである。

年も近い。もう二人

幼なじみだこの南方の地域に住む望田智君と他田

弘幸君と小林拓也君である。だがなぜか私には

男の友達しか集まらない。なぜだろう。だが

私はまだこの世に危険が再び迫ってくるとは

思っはいなかった。

「おはよう。弘君」

「おはよう。那野葉。そういえば那野葉は俺以外他に

好きな人いないのかよ」

「いるよ。雄介君に智君にそれに拓也君」

「那野葉てさ。そいつらの事僕より好き？」

「友達だよ。。大親友。だって私浩君のお嫁さんになるって。決まってるもん」

「なんで僕が君っを嫁にするんだよ」

誰が決めたんだよ」

「お母さん同士」

「僕聞いてないよ。かってに決めるなよ」

「知らないもん。お母さんが決めてるから」

たく僕たちの気持ちを考えろよ」

「…うん」

「お前はさ僕の事好き。友達として好き」

「弘君は」

「僕はその…」

僕の鼓動がなった。

「おい。弘幸だよ。弘幸。何やってるんだ。

見ろ弘幸の顔赤いぞ。ほんとだ。那野葉に

好きていったの」

「だから違うてば」

「 そうだろ」

「…関係ないだろう」

「なんだ。つまらない」

「 なあ那野葉。そのペンダント何？」

「これお母さん達がお守りにくれたんだ」

「いつからつけてるんだ」

「生まれてからずっとつけてるんだ。

これつけていれば神様が守ってくれるんだ」

「へー。なあ弘幸もつけてるぜ。本当だ。

那野葉と色違いだ。那野葉はピンク、弘幸は

ブルーだよ」

「ねえ弘君はなんでつけてるの」

「守る為に誰かを」

「そうなんだ。弘君は守りたい人いる」

「今いないよ」

「じゃあ私がこのペンダントで弘君 と町や

人々を守ってあげる」

「君に守れるより。僕が君を守るよ」

「じゃあお互いに守ろう。」

「うん。じゃあ約束」

手を那野葉は差し出した。

「指切りだよ」

「うん」

「僕たちも守るよ」

「すごい皆持ってるんだ」

「うん」

「いつまでも皆でいられますように。祈りの指切りを
皆でしていたその時光りが幼稚園に降ってきた。、
太陽のような光りがきらきらと。園児達に襲いかかった。

「先生。いたいよ」

「皆しっかりして」

「苦しいよ」

那野葉は突如苦しくなり。倒れ混んだ。

「大丈夫。那野葉。なんなんだ。那野葉の状態が変だよ。

これ。光ってる。これは巫女の仕業だよ」

「弘幸見えるのかよ」

「うん。見えるよ。那野葉。しっかりして。僕が守るから
。死ぬなよ」

弘幸は自分のペンダントを外し

那野葉に掛けた次の瞬間、那野葉の体が光った。

「那野葉の体が光ってる」

「本当だ。弘。何の力だよ」

「青龍の力だよ。人を救う力だって。

「へえー僕たちは戦う力だよ。いいじゃあん。役に立つんだから」

「うん」

那野葉は目を覚ました。

「那野葉。大丈夫？」

「弘君。大丈夫」

「よかった」

「私どうしたの」

「君は天界から降ってきた力にやられたんだ。

俺のこのペンダントで助けた。幸い君のペンダントが

力貸してくれたから助かったんだ」

「ありがとう」

「僕君のこと守る。一緒に戦おうね。那野葉」

「うん」

「どうします。呪いが解けたわ」

「大丈夫だ。食らえ。ダークファイアー」

光りの闇の炎が園児達と那野葉達に襲いかかった。

「弘君。皆」

「那野葉に触るなよ」

雄介達も敵に立ち向かおうとした。 次の瞬間、雄介達のペンダントが

光り始めた。そして、その光りは、敵の火とぶつかった。

「どうしたの？」

「ガキ達の力に押されてます」

「私がやるわ。フライトフラワー」

花吹雪が飛んできた。

「変な力が飛んできたよ。僕たちの力じゃ守れないよ」

「僕に任せてよ。青龍フラノ」

青い光りで花吹雪を跳ね返そうとした。

しかし、弘幸の力は敵に押されかけた。

—
だが彼のほうが強かった。

「さあそろそろけりを着かないと

。このまま戦うと守ること出来無いから」

。奴らを天空に戻す」

「天空術を使って。そうすれば大丈夫だ。後は

あいつらが倒してくれる」

「そうね。やろう」

「ああ。さあ始めようか」

...

第四章

第四章に続く…

ストーリー

この広い岡山に住む。佐倉那野葉5歳

幼稚園生

生まれたときに精霊戦争に巻き込まれ

呪いを掛けられる。

その後、幼なじみの弘幸達に守られながら

謎の花巫女鈴にたち向かおうとする。

そうこれは、天空の巫女にたち向かおうと

する。少女の物語である。

第四章【契約術】

あの戦争が開けた後、再び、巫女が現れ。

精霊戦争を侵し始めた。

園児の私達は親達の意志を継ぎ、たち向かおうとしていた。

だが巫女の攻撃は私達のペンダントの力を超えるような力だった。

私達は危険な状態だった…

「はあはあ。ちょっと厳しくなってきたね」

「うん。」けどなんとかなるよ。行くよ。那野葉」

「うん」

弘幸は術を唱えた…

「青き光りよ。汝の命に答え。いにしえの力を解き放て」

青い光りが放たれた。空のような光りが…

「現れよ。青龍竜。レイティス」

青き光り竜青竜が現れた。

青竜竜は青き力を解き放った。

「ぎゃー」

そして、その力は那野葉と弘幸を包み込んだ。

二人の体が光った。二人は大きくなった。

まるで先ほどの二人とは違う感じがした。

「見て。弘幸と那野葉大きくなってるよ」

「すげえな。これが弘幸の力なのか」

「ああ。弘幸は神に近い存在かもな。きっと」

「今だ。那野葉」

「うん」

那野葉はペンダントの術を唱えた。

【術式】

「星の光よ。私は那野葉。汝の命によりいにしへの光りの

力をこの地に解き放てたまえ。ライト」

光りの竜が現れた。

「竜だと」

「あれは神の竜です」

「我らの竜の力でぶつわよ。我らの日本征服の

邪魔をされるわけには行かないわ。行け。我が神竜

ダークネス」

闇の竜が私達の前に現れた…

「あれは。何？」

「闇の竜だ。来るぞ。俺に続き契約術を唱えるんだ」

「わかった」

「そのまえにあいつらの攻撃を防ぐぞ」

「うん」

「行きなさい。闇の竜よ」

「はい。主」

「我が竜の攻撃を受けるがいい。食らえ、ダークフォルス」

闇の竜は闇の呪詛を解き放った。

「デイラント。今よ」

「了解。我が闇の花の力を受けるが いい。フラワーダーク」

デイラントは、闇の花吹雪が解き放たれた。

「弘幸君。今よ」

「おう。行け。レイティス。ブルースノーフラワー」

青龍竜レイティスは青き花の結界を張り、

攻撃を花の結界を張り、攻撃を防いだ。

「今だ那野葉…」

「うん。ライト。闇と花吹雪を破壊せよ」

「承知」

「行きなさい。わっしょい蒼天フラワー」

青き太陽の力は敵の攻撃を全て破壊した。

竜まで。

「なに？我らの竜達の攻撃が破壊されたとは

このままではまずいわ。防壁よ」

「はい。これで守ります。太陰　　。光り発動」

ディライトは結界を張り、守りを固めた。

「プラス結界よ。天空天候」

天空家の結界を発動させた。

「遅いぜ。契約術発動。那野葉」

「うん」

私と弘幸は手をつないだ。

「これで終わりだ。行け」

【契約術】

「ライトブルー晴天レインハート」

弘幸と那野葉は光りの契約術を

解き放った…

その光りは、天空族の結界を跳ね返し、召喚竜

と主達を飲み込んだー

「この我らが敗れるとは」

「巫女様。貴様らがしたことは我らと鈴さまが

許すわけには行かぬ。いつか貴様らをこの手

でつぶしてやる。ははは」

「姫よ。いつか我が物にし破壊してやるわ。

おほほ」

天空之巫女は兵士デイラントと共に

光りに飲み込まれ、天空へと消えていった。

「終わったのね」

「いや。最後に締めだ封印しないと」

「うん」

「行くよ。フライトビリーとライト」

天神の翼の光りが青空に放たれた。

地平線上に…

その瞬間、天空は封印された。

「これで終わりだね」

「うん」

「さああいつらの元に行こうぜ。援護に」

「そうね。今度はどうするの」

「どうするの」

「決断出す前にお前らも。レベル上げ解くな。

レイティス頼むよ」

「はい」

青龍は青い光を拓也達も掛けた。

「わあ大きくなった。俺たち強くなったのか」

「ああ」

「ありがとうな。弘幸」

「おう。さて準備も出来たし作戦を言う。

次の作戦は。

「サテア、リズを破壊する。フレア、ティアラもだ」

「分かった…」

「行こう」

その時、声が聞こえた…

「ふふふ。私の母をよくいじめてくれたわね」

「誰」

「私は天空族の娘。ステア。全て拝見させて貰ったわ。

私はあなたたちには興味がない。けど世界の崩壊には興味がある。

けどあなたたちの死ぬ姿が見えるわ」

俺たちは死なないどうかしら。

いずれまたこの地で待ってるわ」

…

「ではさようなら」

「おい」

声は消えた。

「なんだったんだろう」

「ああ。けどいつか何かが起きるのは

確かだ」

「その時は私達で守ろう。奴らから守る為に」

「ああ」

じゃあ行こう。友達の方に」

「うん」

僕たちは長い道を歩き始めた。

小さな足で一歩ずつ…

「ねえ。一つ聞いてもいい」

「何？」

「弘幸君は私の事好き？」

「内緒」

「どうして？教えてよ」

「卒業式の日に教えてあげる。中学の」

「約束ね」

「ああ。約束だ」

「ねえもう一つ約束して欲しい」

「どんな約束」

「この先も私を守るて言う約束だよ」

「そんなの当たり前だ。この先もだ」

「うん。私も弘幸君をこの先も守るね。だって

友達だもん。そうでしょう」

「うん。そうだな」

「じゃあ約束の証のしよう」

「えっいいけどどうやるの？」

「握手だよ。友情の」

「友達の約束は握手なんだ」

「いいよ」

「ありがとう。はい。手出して」

「うん」

「これからも宜しくね」

「宜しく」

僕は那野葉と友情の握手をした。僕は思った…

「那野葉が僕を好きになるまで時間がかかる。

けど僕は那野葉が好きだ。だから僕は那野葉を守る

。だからいつか君の呪いが解けたとき君を迎えに行く。

その頃、君は僕のこと好きになってるかは分からない。

けど君に出来ることはこれしかない。君が僕の

気持ちに気づくまで…」

「もうすぐだよ。皆のいるところは」

「ああ」

私と弘幸君は仲間の元にたどり着いた。

「皆。遅くなってごめん」

「いいよ」

「皆無事か」

「ああ。残りは二人だ」

「そうみたいだな」

一方、天空に戻ったリズ達は意識が崩れかけていた。

「リズ、サテアしっかりして」

「フレア、ティアラ。私達の力はいつらに効かなかった」

「…二人はよく頑張ったわ。大丈夫。今直すから」

リズは光りに支配されていた。体は光に覆われ

精神が崩れ掛けていた。

フレアはリズの体を闇で治療していった。しかし、

リズの体はどんども光に包まれていった。

「そんな。私の治療が効かないなんて」

「これが彼らの力よ。どうにもならないの」

「リズ…」

「リズ。サテアは大丈夫よ」

「応急処置できたわ。天空で回復させれば

直るわ」

「分かった」

オープンライト

ティアラは光の扉を開いた。サテアは扉

の中に寝かせられた。

「ありがとう。ティアラ。この恩は いつかするわ」

「はい。しばらく休んでください。。時間はかかりますが」

「それでもいいです。ありがとう。。フレアも」

「はい」

「では失礼…」

サティアは精霊界へと消えて行った。

「よかった…サティアが無事で」

「…」

「フレア、後は任せします。作戦は こうです」

「那野葉には闇が効きます。あなたの呪で

目の視力を弱くする事が出来ます。それから

智には火です。フレアあなたはいろんな属性の力を

持つので水と火を融合し智の攻撃を防ぐのです。

拓也には雷で攻撃しなさい。奴は白龍の力を

持つので電気が効きます」

「分かりました。この作戦必ず成功させて見せます」

「…頼むわね」

「はい」

「それとティアラ。あなたは雄介を撃つのです。

あなたの花の力は光を破壊することが出来ます」

それとフレアの力を融合すれば奴を倒せます」

「分かりました。このティアラ必ずリズ様の敵を

撃って見せます」

「ありがとう」

ボタン

リズはそのまま意識を失った。そして灰になり

空へと消えて行った。

「リズ様…安らかにお眠り下さい」

「リズ様…見ていて下さい」

必ず敵を取って見せます」

…

「フレア様。彼らを家にまいりましょう」

「ええ。いざ地へ」

果たして那野葉と弘幸達はこの世界を再び

悲劇から救う事ができるか？小学生の私達の運命の

戦いが始まる。

—

五章に続く…

第五章

【第五章】

【天空戦争】

その思いは届くのか…この世界は私をどんな結末にするのか。

分からない…ただ願うだけ…

小学校に上がった私達。私達が天空家と戦ったのが

幼稚園の頃である。今の私達はあの事件から

成長し戦えるようになっていった。

私達は小学校に入学した。クラスはばらばらだが

雄介達との関係は今でも続いている。例えばばらばらでも。

しかし、成長した私達に戦争へ出るように申し出があった。

那野葉は新たな作戦を切り出そうとしていた。

「那野葉作戦ねる前に一つ聞いていい」

「いいよ。何」

「奴らが地上に降りいるのは誰の指示で降りている

分からないけど効いたことがあるんだ」

「彼女の事」

「じゃあ話早いな。彼女はどんなやつ」

「彼女は天空家の娘。ほらこの前声聞こえたでしょ」

「ああ。あの声そいつの声だったんだ」

「そうなの。彼女の名前はステイア。力はなぞよ」

「なるほど。それから」

「後は精霊かな」

「精霊なら効いたことがある。四人いるんだろ」

「うん」

「俺が効いてるのがサテイア。火の使

だと言う情報しか知らない」

「奴はまだ生きてるはず。用心しないと」

「そうだね」

「俺が殺したのはリズだ。光でぶった」

「さすが雄介」

「僕はそのサポートだな」

「お前がサポートしてくらたから天界へ

送り混むことが出来た。ありがとうな。拓也」

「おう」

「これからも頼むぜ。智も」

「うん」

「それとフレア、ティアラは謎が多い」

「残り二人は強いと思うの。弘幸君。分析

お願い」

「わかった。分析するぜ」

「弘幸任せたぜ」

「おう」

弘幸は分析術を唱えた…

【分析術】

いにしえのちからよ。我がといに答え

他の物の能力を移したまえ。ライトオブジェクション

「見えたぜ。那野葉」

「それで二人の能力は」

「ああ。フレアはいろんな属性の能力を持つ。

火、水、雷、呪。それらを融合し攻撃することも

可能だ。そしてティアラは花の力を持つ。

奴は天空乃女王の親戚にあたるから。zただ

同じ能力を持つ」

「なるほど。ありがとう」

「ああ」

「じゃあさっそく作戦を言うから良く聞いて」

「…」

【作戦①】

「智君。あなたのペンダントは光の能力を

持っているからその光でフレアの闇を浄化出来るはず。

任せていい」

「いいぜ」

「頼んだわよ」

「おう」

【作戦②】

「雄介君は火のペンダントだっけ。氷を水でとかせるはず。

頼んだわよ。拓也君は二人の守りにはいってくれる。

弘幸君は私と一緒にやるわよ」

「オウケイ」

「皆いい」

「ああ」

「那野葉と弘幸はあいつを倒すだろ」

「そうだよ」

「分った」

「皆合い言葉言おう」

「そうだな」

「じゃあ集まった」

私達は集まって手を重ねた。

「じゃあ行くよ」

「うん」

「皆で平和をつかもう。フレンドジェリー」

私達は近いの言葉を言ったその時、精霊

一族が現れた。

「あれは。精霊一族」

「おい。降りてきたぞ」

「ああいつが天空乃女王の娘ステイア」

「なんだって」

フレアは私達の前に舞い降りた。

「仲良しごっこは終わりかしら」

「仲良しごっこなんてしてないわ。私達は

あなたたちからこの岡山を守って見せる」

「この地は我らの物にするためにあるのよ」

貴様らごときには用はないわ。あなたは

我らの器になりこの地を支配するのよ。

無駄なあがきよ。ステイア頼みます」

「はい。死んで貰います。がき共。ワラーダーク」

闇が私達を襲い始めた。

「バリアステイル」

「助かった拓也」

「礼ならこいつを倒してからだ」

「うん」

「さあ始めようか。天空族」

「防いだところで意味がないわ。あなた達は

ここで死ぬのだから。死んで貰います。それが

天に散って貰いますわ。花吹雪発動」

「くる」

「気をつけろ」

「おう」

「ダークレイフラワー」

ステイアは闇の花吹雪を解き放った。闇の花吹雪が僕たちを襲い

かかった。

「任せてくれ。ライトリングブレス」

光が闇の花吹雪に衝突した。

「よしこれならいける」

「よそ見をしていたら死ぬわよ。闇に落ちなさい。

氷の氷柱発動。黒き氷よ。彼らを凍らせろ。

ダークスノウブルーフトアー」

闇の氷が僕らに攻撃してきた。

「ここで死ぬ訳にはいかないぜ。ファイアリー

ファイアーライト」

雄介の光の火は氷の攻撃を水に変え消しいとんだ。

「ありがとう。雄介」

「おう」

「ちっ貴様よくも」

「あいにく俺たち死ぬ訳にはいかないんだよ。

俺たちはお前らを倒し、この岡山を救わないと

いけないから」

「そうはさせないわ。フレアやっしまいな」

「はい。花吹雪強化発動。 フラワーダークブラック」

花吹雪が強化し智に遅いかかった。

「まだまだ。行けー。ライトペガサス」

智はさらなる光を放った…

しかし、強化された闇の花の力が強く智の力が押されて

いった。

「くそこのままじゃ俺が死ぬどうすれば」

「任せてくれ。ワークワープ」

拓也はワープ術を唱え、智を安全な場所

につれていった。

しかし、フレアの攻撃は襲いかかって来た。

「させるか。バリーペガサスライト」

拓也は智を花の攻撃から

守る為智に結界をはった。その瞬間、敵の攻撃を

防ぐことができた。

「ちっあと少しで始末できたのに…」

「助かったぜ」

「ああ。けどやっかいだな…」

「こりゃ僕たちで倒すのは難しいね」

「かもな…さてどうするか」

一方、雄介は、最後の戦闘に突入していた。

「精霊さん。そろそろ時間だ。けりをつけさせて

貰うからな」

死ぬのはあなたですわ。

「これでくたばりなさい。食らえレイレスティー

フラワーダーク」

「効かないよ。食らえ僕の新術ライトフォルテライト」

強力な光が空から放たれた。

「あれは精霊の力吸収し、放っているの。

させないわ。ライトなでしこダーク」

しかし、ティアラの術は、雄介の力により

全て飲み込まれ、そして、彼女自身も飲み込んだ。

「あーこの私の力が押されるなんて。馬鹿な。この痛

みは必ず晴らしてやる。あー」

「ばいばい姉ちゃん」

彼女は光の肺となり消えて行った。

「さあて拓也達の元に行くか」

僕は拓也達の元に行った…

僕が見た風景は、崩れた地面に立ってる二人の

姿と笑いながら立っているフレアの姿だった。

「お前ら無事だったか」

「なんとかな。だだあいつは簡単に倒せないや。

僕の力を全て跳ね返す」

拓也が守ってくれなかったら俺死んでたんだ」

「そうなんだ。そうだ。僕いい案

があるんだけどのってくれるかな」

「勿論」

「やった。じゃあ言うね。あいつは火と光の融合術が

いるんだ。僕と智の力で攻撃する。弱ってきたら

拓也の結界能力新切り裂きバリアライトを

発動させれば奴を灰にすることが出来る」

「なるほどよしその作戦で行こうぜ」

「おう」

「僕に続け」

「おー」

僕たちはフレアに向かって走り始めた。

「くっちょこまかと来やがって。」

「死ね。ダークフラワー」

闇の花の火が攻撃してきた。

「任せろファイアリーライト」

雄介は火を放った。

「今だ。智」

「うん。食らえ。スリーライトロイズ」

智の太陽の光は雄介の力と融合した。

「行けー」

「このくそがき。強化ダークフラワーライトネス」

しかし、フレアの強化魔力は雄介達の力に押され、フレアごと

飲み込み始めた。

「何て！ 渡しが押されるとは。あーこの天に誓い。

あー」

「今だ拓也」

「うん。これで終わりだーバリーライトソードライト」

拓也は光のバリア剣で光に包まれたフレアを切った…

「あ…女王…様。いいえ女王様。私は役目を果たしました」

フレアは巫女の名前を呼びながら星の結晶となり、空へと消えていった。

「終わったな」

「うん。」

「そろそろ待ち合わせ場所に行こう」

「…うん」

一方、弘幸と那野葉はステイアと戦闘中であった。

「お前。何が目的だ」

「そっちょくね。私は世界征服のために動いてるの。

この地は腐ってる。働かないと生きていけない。という人が

いる。けど皆天に天に生きる道を祈らない。だから

リセットして新しい世界を作るの。そのためにあなたが

必要な訳。そうは思わない？」

「それは間違ってるよ。リセットなんてしたら

この世界で暮らす人が不幸になる。私はそんな

事許せない。だからあなたを止める」

「俺もだ。お前の考えは間違ってる。だから俺たち

がただしてやる。お前を止めてな」

「ふふ。そう来ると思ってたわ。さあはじめましょう。天

か光の戦争を…」

【第三次天光戦争】

私達は精霊達を倒し、天空戦争を食い止める事に成功した。だが天光の戦いは終わっていなかった。

ステイアは天の光を使用し、町を滅ぼそうとしていた。

彼女を止めない限り、天光戦争は

終わらない…

私と弘幸はステイアに今たち向かっている。平和の為に…

「我らは天空之娘ステイア。いにしえに従い

この地を滅ぼしに来た」

「それは違う。天はこの国を殺めてはいけない。

神様がいるから。見守ってるから生きれるのよ」

「黙りなさい。聖杯ルーズ」

「聖杯の光を放った…」

フラワードリーム

那野葉が放った花の矢はステイア之体に花の光を放った。

しかし、ステイアは花の力で光を浄化した。

「効かないわ。ストアレインズライト」

それは雨の光だった。

「雨の光で浄化するなんて」

「なんて強さだ」

「我らの邪魔をするな。クリズライト」

那野葉に邪悪な光が迫って来た。

「させない。ライト」

弘幸は光の結界で那野葉をステイアの攻撃

から守る事が出来た。

「ありがとう」

「ああ。けど強い。何かいい方法がないかな」

「いい考えがあるわ」

「どんな方法」

【作戦】

「おそらく彼女は属性魔法を最後に

出すはず。契約術で止めるわ。 フラワーブルー

スノーライトを。これをすれば彼女の

属性魔法が解けるはず」

「わかった」

「だから弘幸君には私の盾となって守って

欲しいの。その刀で。その小刀には弘幸君

のペンダントの力が宿ってるから」

「了解。任せろ」

「うん」

「行くぜ。はーブルーソード」

弘幸は青き力を放ったペンダントの力を借り、
敵に立ち向かった。

「そんな小刀が私に効く物か。雷神ソード」

光の剣と青き剣がぶつかった

…

一方、那野葉は術を唱えていた。

【契約術】

「神よ。我らに力を与えたまえ。

私は那野葉、いにしえの元に誓い

。この聖なる光よ。この地を支配する邪悪な

天光を天へ解き放て。アイリスライト」

ついに契約術が解き放たれた。

「なに？」

「ついにやりやがった」

「弘幸君離れて」

「なんだって」

「隠すつもりなかったよ。これはね生まれたとき

に掛けられた呪い。けど解く方法がある。あいつらを

倒すこと。そうすれば呪い消えるんだ」

「そうか。じゃあ倒そう。大きくなったら。皆で」

「うん」

僕たちは誓った。この地を平和に…

春、私達は卒業した。

私は弘幸君に呼び出された。桜の木の下

に。

「弘幸君…卒業おめでとう」

「ああ。おめでとう。クラス違ったけど共に巫女と戦えて

うれしかったぜ」

「私も。また作ろう。平和を皆で」

「うん」

「それで話ってなに？」

「俺が守りたい理由知ってるか」

「知らないよ。何？」

「那野葉が好きだから」

「ありがとう。返事なんだけど卒業式の日まで

待ってくれる」

「勿論」

「じゃあ約束」

「了解」

「それよりなんの約束だよ」

「おまえらには言えない約束だ」

私と弘幸は近いの指切りをした。

そして、私達は新しい戦いを迎えようと

「なんだって」

「隠すつもりなかったよ。これはね生まれたとき

に掛けられた呪い。けど解く方法がある。あいつらを

倒すこと。そうすれば呪い消えるんだ」

「そうか。じゃあ倒そう。大きくなったら。皆で」

「うん」

僕たちは誓った。この地を平和に…

春、私達は卒業した。

私は弘幸君に呼び出された。桜の木の下
に。

「弘幸君…卒業おめでとう」

「ああ。おめでとう。クラス違ったけど共に巫女と戦えて
うれしかったぜ」

「私も。また作ろう。平和を皆で」

「うん」

「それで話ってなに？」

「俺が守りたい理由知ってるか」

「知らないよ。何？」

「那野葉が好きだから」

「ありがとう。返事なんだけど卒業式の日まで
待ってくれる」

「勿論」

「じゃあ約束」

「了解」

「それよりなんの約束だよ」

「おまえらには言えない約束だ」

私と弘幸は近いの指切りをした。

そして、私達は新しい戦いを迎えようと

していた。

【第七章】 天空之悪魔

o

—

—

—

—

—

—

-

-

-

-

-

-

-